日用重寶
增補教訓
頭書繪抄

女中庸鴻猶箱

とんるちうようめのうもと

全

松田

目録

教訓女中庸	産後養生記
唐士賢女鑑	難産の妙法
近江八景	七夕哥そし
南都八系	蓮土廿四孝略縁
修學寺八景	小児養育学
三夕の和歌	婦人心得艸
婆哥德之事	結納贊姻心得
萬物の起源	月の異名
産前産後心得	破軍星繰方
安産の法	潮汐の淺干

明治辛未大呂増補再刻

女中庸瑪瑙箱

全

三夕の和歌
優寄德の事
義物の起源
産業を活潑
安產の法

發兌書肆
前川文榮堂梓

教訓女中庸
唐士賢女鑑
近江八景
南都八景
修學寺八景

產後保養生地
延產の妙法
七夕寄居
蘆土廿四年形像
小兒養育學

婦人心得草
結納婚姻心得
月の異名
破軍星繰方
關法の發示

換序

中庸ハ書乃名ニ而ハ受用の法也故ニ孔門傳授の心法也と言り中ハ天下の大本庸ハ天下の達道ニ而ハ體用一源の源妙也堯舜ハ中と云ヒ曰り中則常也孔子中の内より庸字を出ス中庸を貴とし而ハ嚮ニ洛陽の浪士植村玉枝子彼貝原氏乃女大学ニ擬ひ女中庸を編述して幼女心操の誡とし尤女子の室鑑閨門の教訓を以て能ハ所なる也ニ流布繹歳あり而ニ早霜稍押移り板木磨滅も少ク孫ハ今回再板をんと而ニ授訂を求む依て其固陋を忘れ竟より売筆を添て闕畧を補ひ乞を增彼を減じ專女子有用の教誡を集て以為書肆技を

東都　鶴亭　藤村秀賀識






近江八景
唐崎の夜雨
粟津の晴嵐
三笠山の雪
東大寺の鐘
雲井坂の雨
轟橋の行人

修學寺八景

遠畑帰樵
ながむるは
くまもあらはるゝ
しぞおひ
はまとく
うるゝ山
うな

松濤夕照
新うまく
のうふ夕
日れまつが
され秋と
あびる風
のいろう舟

濤雲夜夜
しらひ
こゝく
雲の
とゝ
れ
水の夜は
ぶ名ゆ
あふ
しのぶん

廠峯蓄雪
しらまはる
雲はゆふべの
こ絲織く
そらはさや
けきひえの
山う紛

村落晴嵐
夕あし
吹のうし
てや
雲
山あ
よう
の
されは
うふ
さと人

















修學
晩鐘
この寺は
されのは
がまは
ひゞきそふ
入れのうちも
よそにかわりて

茅檐秋月
山あの
ふくもを
ぬぐは
こゝろとも
うやが
ぐの月は
しるらん

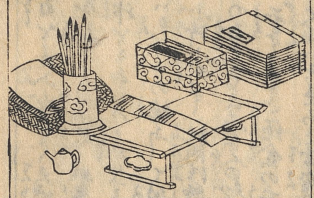
平田落鴈
山里は
秋が成は
しむくらゝ
うを
いるぞ
あるる
色ぶき
て
紙

三夕之和歌



優歌之徳の事

優歌ハコゝ國の風俗ニ於て神代の昔ヨリ始まり久方の雲の上人より下あまさかる鄙の伏屋の乙女にもまで打まれて思ひを述るものにして古今集の序にいふ如く

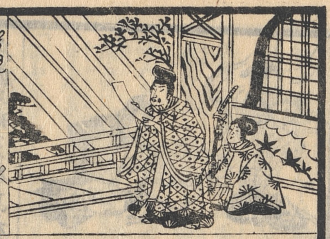


女中庸

一丈人乃妻を親迎る事ハ。才一家父母より。我所と與ニ。能法ノ人させむが為なり。志ハ

力をも入じとく天地を動し同ぶ見て奴鬼作をもあられと思ひする気うこの徳ふして彼小野小町まこ純固法師の魂気などいみる人の知るなりまこ経倉の右大臣いそまらと事殺り或年森魂ゆりつぐきて諸作物を根きりそうまへ廿ぐるを殺きあひく一首の歌を詠ふ「時ふりをぐれば氏のうまひあり八大鈴玉あめ屋めぬへ」と捨しなれば忽魂ゆきそのやし拝の外

なり。男を恨む。姑を
にくむなり。不ならば。
婦のんよりおくなること
なり。けまじ素なり。
姑い婦を慈む。婦は



其手なりしと言うむ
し津の国天王寺に遊
あべまり河部主廉といふものて子
又照田姫といへるあり
なるがいとけなきと紀
母い世をたり徒母より
育られしにそ母にも
又子二人出来しなどに

粗姑に。孝ひを。弱せ
愈な理なり。故より
誰の人も。孝んなる
人と讃まじ。しく後
半漢。不孝なる婦と

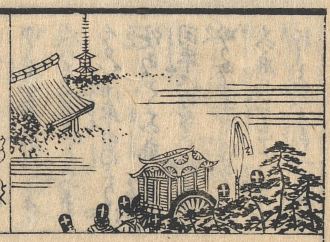
照田をあくむるのひとうこ
ならばあまりさへその
うちに兄ーきを稱こ
み松紫ぶしとれし又は
後ろ言をかまへこゝ山ふ
もてんとけるをある人
教まつる思ひこゝ寒を
吉原に居るぞ吉原



卑めば。ゆゝぞ恋を
壇。志り終ば。孝行なる
爲き理を人こゝ孫て
知まるかその家利。
玉極。不仁なる婦も。

婦こゝ妻を去んとに照
田うへ川くこれをさるべ
ふなぐめ浣るの彼岡子
騫の匠に似ようてる田
十五歳のとき紀田をうへて
居さり」が岡の大臣家天
王ちへ氣くをあつを見て
「なかなかさなるぞ分けく
ゆく舟を雲再けるなく
人は見ぬめり」とはづきを
ちるを出車の内より浮
浪ありて吉原に乞更
同車にのせて都よつ来
ゆりあつまで行なく父
吉原も居まてく安ひを
始しとはへり毛一ツ秋の

人前にてゝは。孝行
なるか分野あれ
ものなる案。史婦は。
いとおしく大切なる。
我子は妻なまだ。



とく二ツにハ孝の徳ともいふべし亦石丸ゑもそ淳の演の演父の娘よ丸女といへるありけるが何時ともおつまく演あうたひとく拝びみるに國の雪巡見しめひしまをきくし見し

其男姑のんりいと
わしを思せざらむや。
思ひ思ふ思ひ此んぞ
あらば。何のをめにか
よびむかふ思さや。

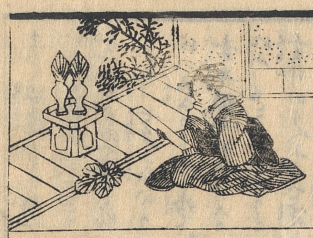


面白くもうふりのなとてたまたるに恥しくやそひんとなるけ
蔵るを守りくりしか
六人とらへ来り演会と
唄ひしめふに丸女も
この中にありけるが
「徳ともなりたるし也を

娶迚ゆる時にハ。憎
ある事ハ寡だりな
今我どもも。婦の宮城
業此仕業。必質弱の
行状の。今く侮ら

演ぶるいかり雲井に
こちのぶるらん」と演て
なりたれば守光ひかり
うんじ女は宗の名を
一ツあつりたるを女婿
近してあまをうあん
「むらさきのくそのうい
ぶるもかかくさんうつぎ
のこするあまのみなれば」
と御ぶ蚤くさんとん
をを守名ざめりれし
訪まぐ風雅のたぐし
原なれば老ぐにとゞめて
妻をせんと宣へばたゞ
その父母の命なりして
やうぐを殺るよしと

ざはなは。慈悲する
心意次第より落く
なる。日は添て思む
心は出来て。去程。拘
事事角くしき

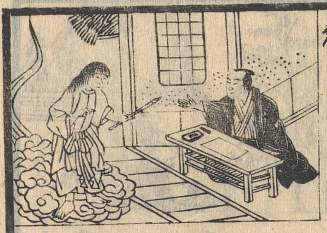


若へなれば毛むなりと
そまつり父母とかり
むりへて妻とれ あまと
いへるまゝ正保のころ
京の行し医師三村何
がしれむきを女を使女と
いへるあり なるがいかれる
事なや年三十女を殺る

成りて拝ぶ。復婦も。
他人の家へ嫁し。
男より悖逆姑所
不孝にをむと。たゞもふ
心は些も何なまじ。



菊物の起原

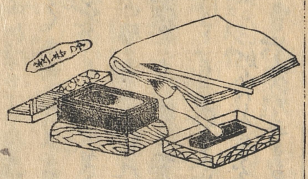


○筆は意神天皇の御宇にはじまると四史に見えたり一流丹後の所傳与松といふもの手跡とよくに筆はやさしくなく本筆にさく習ひ居る切戸の文殊より手の能と立ちある中紀

和を失ふものなり。此理を能く辨へ。舅姑は家を化せしめふものなり。我父母よりも大切なり

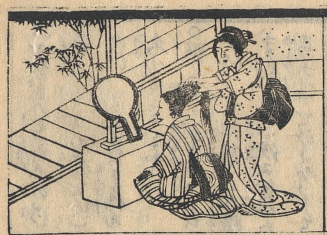
宮部けざり紀章を又忽然とおもひ出あんを年来手跡相伝ある ゆゑなれ筆をまいらせんとて毛筆をあふ与松よろこび君はいづくの御方なやと問ふ然ばこれは切戸の傳ものといひつく忽ち接淸ぢく矣あふ扨は年ごろ能をうけしに文殊なさつの後に意をもとゝ能られ筆をあふや実にありがたしと一首の詠をさゞ「五月の能ひはえてぬるゞ」あを筆の形なあさら

和解て。能はりやぐし。義舅姑の仕業なり。おし紀事ぞ詠ぶ。竟は舅姑の恵なはあらば。ゑゞ所にようらぬ



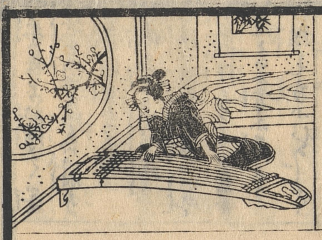
けくしくと泝しとなん
毛より我知る後にはしも
○硯は黄帝の製始めしとや
とや佛家にては硯を文
珠の眼を参り又智恵の
海ともあるといへる
○墨は推古天皇十八年に
高麗より墨徴といへる

事ぬあるか拙へり。
かく有ものぞと。身を
省て。我色を能く
おもひ改めあ。却て
孝行の実を弱道し



参りたるは紙よく墨
紙を作るとは是は此時より
日本に墨あるとも
○紙も墨と同時なる
○漢は伊弉諾尊の時既に
白銅鏡あるしと高麗
泥とは書に見えたり
○指も出ふ

俺合ても。男姑を
怨て咎むと思うに。
第一とが見怨むか
心殺なば。毛は天地も
弃ら給。人道ありき

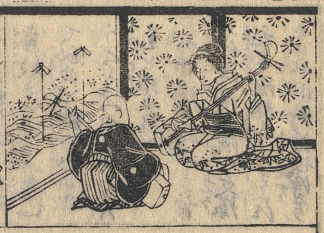


いざなぎの弟なりの法
緊な湯津の掘とさし
ゆひしとはまたは結ぬ
久しきなりや
○琴は大己貴命のもち
ゆひし天沼琴より始
まるといふ一説は和琴は
弓六張をひきなりして

皆さ。不祥たるを。我
此子孫の衰ふ所さ。
こざなりと思ひしも。
恐懼なば家内も能
治り。子孫も栄利拡

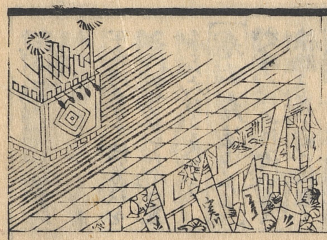
元を神楽に用ひるを
こゞらいしとて後人
琴より作りうつせり元
今もちふるところ後の琴
は元年より出る元来
琴なり
○琵琶はそのけば名を
志しは江州天皇の御宇
貞敏といふ人入唐し
て秘曲を劉二郎より
うくといへるをそこくは
元を始とはべし
○三味線の始まりは百
八代後陽成院の文祿
元年琉球国よりこれ
その比渋野検校渡りし

木のかばら明がく。
家名を傳んも事ゆ
然の理なり。
姑より。親よりも女の代。
孝行を。法まば婦



の文句にかしと付たり
まさ角沢撿校とて書
曲ふ工なるものあらく浮
ゐりのかしに合せての三
味線をひきけドむ
○髪を結ぬしは四十代
天武天皇白鳳十年男女
始てかゝをゆひしとゝ

とも。和順無し。
此歌の意味を能く。
理会て。男姑に志実
に。孝行を謁すべし。
一婦人の幼と紀は親に



○自称の始は延宝四年
堺の町人小西行しに
國に流り六宮とふりの
より製法をつゝ来て
結ぬに廣む
○芝居の始は寛永元年
江戸中橋において猿若
勘三郎とふりのはじめて

須ひ壮の節は吏に
志たがひ。老ていふに
従ふを。三従の節也
いへ里。三従のうち
まは吏りしたがふ





雖し。良人は外を勤め。婦は内を守るといふ。先史を立君の如く。恭傳婉娩べき事ぞ。唐太子。



或人の女嫁し。初の行く。是良人に疾病を稟。宮嬪換じ変まり。女の親恵がこゝ思ひて。女を戻さんといへ共。



コガ父母その外をさし比
一家親戚とあつ免れ遂
に後代とあるべし

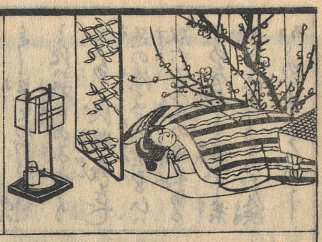
○常とする吉日

甲子 同戌 乙午
同子 同戌 己午
庚申 同戌 丙午
同戌 辛卯 同酉

女最深く愛て。我夫
かゆうれ病を禀る
事も。我既の不幸も
定まる事也。古語に
夫女不見二夫。忠信

右のうちをえらぶ常
をべしさらに平産う
たがひなし
一懐胎は女子一生の大
役なれば法を大切に
て常にちりうつぶとな
をべからず
一既をかぶめて所べし
そし足とのびして所
とれば胎内の子やとり
てうるしば難産をせ
足の後に蒸餅あるひは
双六ぶん木の丈夫なる
ものを重く所べし若
見てばりとのぶ共
かくのごとくをんばし

不仕二君一度醮し
縁。二をび華なる事
是所とあ。却て親を
誅て。是らむん更に
なりしかば。父母も此



一 ちさとこ紙へ子をのべ
をべからん
一 はまづきあるがべ来
らぜ
一 幸さりのあつさものを
食をべからん
一 晩ぞる月より府ちを
つしむべし若気を

芸操を感じ。怠惰て。
戻還むんを止ると
なせ。実より為難さ
心底なり。当時の婦
人。ちまを能学び。及



おかせバ生なく子病成
みしく癒おわく出来一
疱瘡守し能く情さ
急欲を行べし
一 除月ふいてしバ灸を
をゆべからん
○ 情脇のうち好食物
大麦 粟 さび

ぢぬまぶるも。んより
来く重ね事ぞかし。
婦人のん。貞心は堅
固なりい。霧汗も能く。
親の海。仲嫁の使も

[illegible]大根 牛房
[illegible] いちご 枸杞
[illegible] 芹 うど
薯蕷 [illegible] 坊
[illegible] 海月 [illegible]
[illegible] [illegible]
右の類食しくよし
○同禁物
梨 梅 桃
李 [illegible] [illegible]
葛粉 [illegible] [illegible]
大豆 [illegible] [illegible]
[illegible] [illegible] [illegible]
[illegible] [illegible] [illegible]
[illegible] [illegible] [illegible]
[illegible] [illegible] [illegible]
[illegible] [illegible] [illegible]

結納ぞしるゝ。已業
奇矣の縁を整び。一生
の生業も。荘苒ざるに。
些の不実を争誣。夫
婦の乃を離き。他夫を

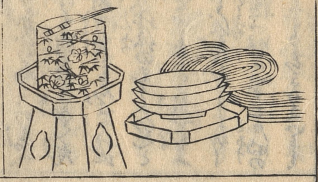


[illegible] [illegible] [illegible]
川魚 [illegible] 油[illegible]
[illegible]
右の類一切食べからず
○安産の法
一夫人のはるゝ事は天地
自然の理なまぶるんざんといふ事はなきなり

嫁し。先夫を革姦の
ごとく見捨るの類ひ。
此烈女の心操を感じ。
松柏乃年の寒より
凋ざるの苦操を。些い



女中十五



の生ぎる時ゑとり婆の
指掌にまうせいまむ時は
難しくる菓のおつるが
ごとく安くとまるとものこ
○産前入用の品
一押桶　小刀
但しまし後六七寸ものも
同じかまる蕎麦粉を使

木菓も散乱にな架
りて採よ。子孫のむも
黄昏。佛山は一木も
なきの苔松は青紫の
常盤ぎしにて殘まる



一古菓三枚　芋
右の古菓のうへにおもて
小刀にて稀の結をつぎ
踊と紙にて包を芋にて
ゆるへ付くおくべし押
桶には芋一をぢもらへ
をぢかし一をぢへまとく
かくを惠方をえらへ

家銭讀書。婦人の苔
探も此欲の如くなる
厄さるのぞし。不義の
眼たりは。史の困窮に
厄を。木菓は麻布。斷

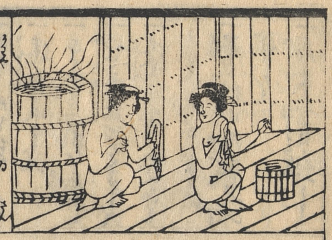


发居の下又ハ人のこゆる家の内ニ地を一尺餘ゆ清水をおく埋むべしそまつにせべからず脇の流ハ其子の命根なれば清水大切にせべし気をそまつにせる時ハかならず病死にして經命と知るべし

絶し我ニ別ぜ。婦の
路を通し。能事を
云甲斐なれまし。
思ふべきなまど。新
真実ニ。婦達を謁し。

○産後養生紀
一七夜迄ざる内ハ生魚
食ふべからず
一却て却ニ於ゆるさお
そるべからず
一精力を養ふべからず
一早く髪を結ふべからず
一ちゆく爪を切べからず
一遠居せべからず
一せきるの風を忌べし
一二七夜庭をそゞるべからず
一大食せべからず又ひも
じきを堪ゆべからず
一早く行水湯風呂へ入
ぶからず
一房事ハ百日忌べし

良人ハ清くむ人ハ。
天地神明の為境ニハ。
嚴ハ幽閑を松とは
見ゆりじ。千葉万木に
秀ニ深。君子の操と



一厠ふひさし、蚊遣
一燃あまいあまさも嚊
一汗せかくなよ
一七夜のうらおやす

婦言。婦功の四の約

婦言。婦功の四の約
婦徳。婦容。
婦言。婦功の四の約

婦言とは。女の口の約束ある。事。一婦徳とは。
婦容とは。女の形の約束ある。事。一婦容とは。
婦功とは。女の業の約束ある。事。一婦功とは。



附酒 芹
めんたい 油乳 [illegible]
右の食物をよく食べ
ならば祝して食する時は
肥立ありて法の病をも
ぜんしつしむべきなり
○雞卵の妙方
一熱のみふく腹腰を塵

第二婦云とあ。言
紫を情とく。物事
魅魅いふ事を法と所し。



だし必要者するの妙也
一ちきのさき三分 胡瓜法三分
楊梅皮三分 甘草一分
右四味を細末にして
老のごとくぜんじもち
ある時は大切なる雞卵
あてもせるに事なり
なり

言吾強りしぞ。不淫
智高取らぬがよし。
強く弱常にいたんと
もるも。巧云をもふ
せうなあ悪しく。



○撲子の名法
一産婦の右の足の小指とゞりの頭に灸を三火を
ぬべし撲産をもち忽ち安産する事めぐ敷ぐ
て言ふ事ふよし
一胎衣ゆりざるなれ
葉麻子
右ゆりをさりすりつぶし
そくいまと称りあしの
うらに強貼し
七夕の歌ぐし
七夕を祭り事法をいふ
異説あまづらに略し
婦人おもて色を祭りて
もろくの歌をかくる

勿論口傳しく。我志り
ゝ法部に置もいへし。
都て三祭ぐらひに
うぎらぐ。凡女の言
同じ起事ね。いかに窓

七夕月
七夕男
七夕里

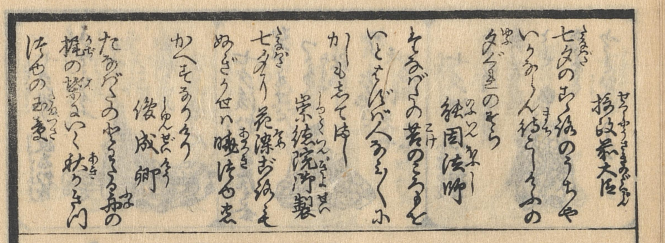
人より遇て毛口よ架
和へ出すべからぐ。戌三
婦宮とて。粧宮の事
なり。鶏鳴ごとに成を
清め。梳紀粧し。衣装



起居挙動神妙なり
するの類に髪容紀粧
衣服れゆうも。所乃
荘り。人に相乗なるに
厭し。志かるを當時。

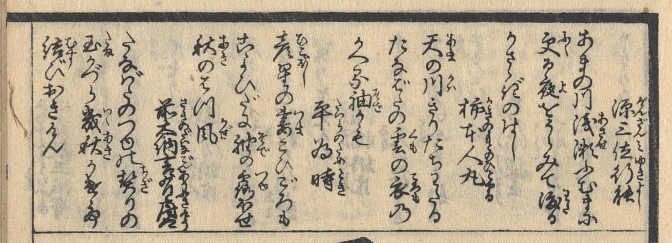


世にもてる時勢なぞ
いひて。呉容なる衣
裳拵の撰拵。又は深
萬なる時粧などいか
さ波奇呉拵にて好べ



拾故郷大臣
七夕のあら絵のうちや
いかなるん結としたふの
夕べきのそら
独固法師
そなびらの苔のころもを
いとさばいへなるくふ
かしもして侍し
崇徳院御製
七夕より花深お絵をも
ぬぎうせい晩清も志
かへそなりなり
俊成卿
たなびらのやくるる舟の
梶の紫をいく秋かさ川
清もの玉美

来らば。そぐ有るべき
かゝるにあらず。見たる所の
麗がよし。第四より
婦功とて。紡績裁縫
洗濯の事より始め。第



源三位行秋
あまの川浅漸かむまふ
更る夜をうらみて流る
うきくぐのけし
柿本人丸
天の川さりたちてゝる
たなびらの雲の衣の
うへる袖かも
平為時
春早の書こひごろも
おもひごゝ神の霧かせ
秋のさ川風
前太納言有房
うなびらのつゆ此契りの
玉かづら裁秋かきあ
結びおきそん

女の所業。真実より
勤め。懈るべし。
一継母の継子を悪事
の有意知りて欺し記
事ぞし。継子は我

二品親王法守
九年のあつのかぐつ天
うぎふけく早人合のそに
風ぞうこふく
匡房朝臣
天の川よとなが月を
あるものを狩る川柱を
契りを見ん
清輔朝臣
まなびこい天の星を
うちはひ心りとなく
星を待らん
兼治親王
まれにあふ昭をあらば
七夕のまへぬちぎりの
うぎりなくれば

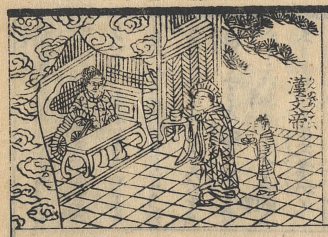
子は兄弟なる。縦都
血を賊與ぞやつふ共。
こゝろ子の父乃骨肉を
領せる此子なれば。
夫婦一躰の理まそれ。


漢云九四孝男傳

的當我子なり。何迚
継子とて。憎隔つべ
きや。都悪の志病を
屈めず。其実に愛
憐をなすべし。さ然ば



継母やは。継たる母と
父母にも書り。物を
合せるに意。美物に
悪な物を法ぶ。同じ
やうなるものなるべい。

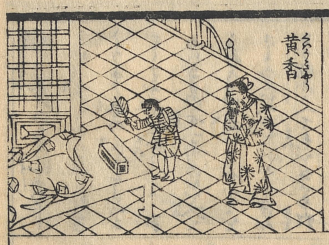


法ぎ合せ難し。蜂と
いふ虫の。卵にむしを
取集て。我に似よくと
いふて育るに。親に殺
遠ちぐ。小蜂になると



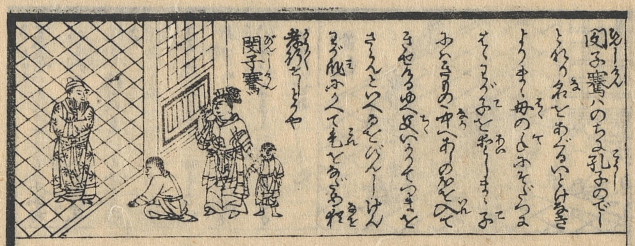
老菓子はやし七十ゐして
いまだ二人の親あるなるが
まいろうしき衣をきておきなき
ものがくまひあそびまさい
ろぶとつまづきころびたい
泣などするを弱な知きあく
知しこれをとしらるを親な
しらせましとの大孝行也

うや。んな我虫をしらせ
しらり。況や人間をや。
縦不仁の生業をしり
とも。我は似よゆゑ養
育し。憐及抱んに敵は



黄香はあんりやうとゆゑの
人も九才のとき母をおくれ父
によく仕へ夏はあふぎの
風おく床をしらべしめ
るが成をもつて妙をなと
あさゆゑ父をふさしむ後
は妙を称るさらへ時の天子
ゆうびをあひしとも

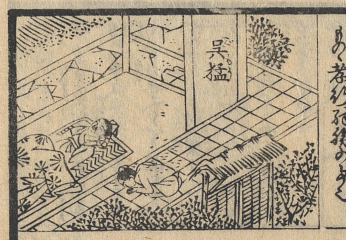
似事容易慮し。或は
姑の悪きを算へて
史に告ハ。我親の咎を
揚るは等し。繼子此
悪事を史は告るハ也



繼子の惡事のことを
告るにあらじ。敢その
親と加て憎讎。亟なる
道を教ずして惡事に
馴ぬ。何を書育し。



却て主婦を露骨
請ず。あまた我恥り
あらじや。嫁を疎略
繼子を僻憎て。是て
史をはこ。つ重り也



呉猛八父母に大孝の人なりまだ幼なきとき母病の没するれば父が母を慕ふを見
ふ父も母を恋ふるの孝を感ぜんと欲の
ゆゑんを知らざるを以て父母の
喪に服する三年の孝行を勧めたり



董永父母に早く別れ家貧しくして父母を葬
むるところなければ人に身を売りて父母を
葬れり天これを感じ十人の女をして
董永が家に織らしむ

女中廿七

女中。人倫の乱るゝは。若夫婦。弁らま果のべ。揮を絶る船のめぐ。妻淫も。
好。字忘ぬべ。ん。を

情。ぬ。。。

唐夫人は崔南とつゝの妻しきうとの年老て万のしうしに歯よりなければ我子をさしおきつゝ乳をもらはく喜びそれは姑しうに悦び唐夫人の如きうくもの我家にあるは未来ゆへしとて死去をしまでさりしと



一史女は先人ばかひ。能く史に見ゆるに事身人なり。姿貞を生質なれば。英も醜も力及ばんと学勤い。

楊香は一人の父を持り十五の年父と山中へ行きたるにもさはゞき糧虎に取り楊香父の命をうしなひ事を出しと天にむかひ祈りいらぶ意を席ふるへて父の義を助けるかふしぎや今こと捨りし虎も尾をふせて迎しとも



善も惡もなかりの なきは。第情をとく大事に来く面あり也。縦史死しその姑ちも。夫人を壊べ来ら次。



二史に見んを。何ぞ
まじ記まし。俗間の
体を見るに。女此史に
別なくの時は。尚往歎乃
解り。雉髪深衣の類



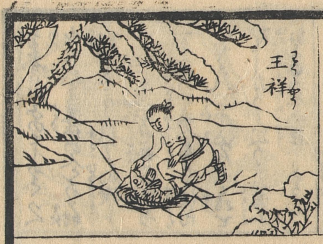
多分まど意。日数稍
法りぬまじ。趣者は
日々尓疎く。歎も遠
げり。衰も子晩しう
失なて。迫げく悪



緣よひまとく。浮名をなぐし。恥をわらはれ事。心うるぞ。存生する時。貞心謁ぞして。死する。何の怨りよ



まとく。志を諠ださや。縱又存生する時恨迄冒なりとも。我死の恥を知らずんや。この心を能心ひとく。死を



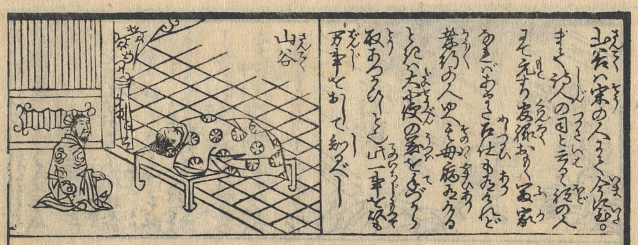
あらぬ人を妻べからば。
一新古今集不邪淫
戒の意をもちゆる。
けらぬぞかり。童さが
うへの小数衣。ゴゲ書



ならぬ。けれかさを捨。
男みとぞ不耽淫を。
現世後世とりりいと
飛童さ事なるに。
増と女の邪淫さらんい。



佛も跡をのひ。神も
悪を果たまふ悪く。
中く云願ふ方なき
仕様なるべし。却て女の
身は。敵史ならぬ史を

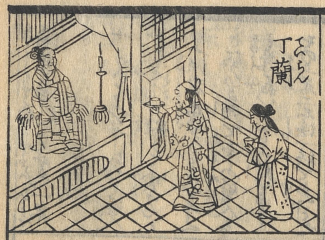


重ぬるまは儲蓄て。
貞女二史を更ぞと。史
記といふ書にも見えた
作りむし唐に。姚玉
景といひし女子。十六歳



王裒は幾人かくまた父王我
つまあくして父幸まろされるが
老を恨え父のまゝ行柏木に
取付て號きくるゝ泪さて柏
さり為て母の墓に鳴て
しかれて後も雷ある時母の
ちゝ行れが侍る所まで
を付しとあるさきかつ

みて夫失ひ給ひ。父母
憐ぬ。又他夫に配せんと。
いひ給ひしとぞ。いうで貞女の
道を失ひむとて。親乃
言葉にも從はで。そぐ



丁蘭は年十四にて母を
失ひ給ひ別を思ひ母の木
像を作りて其人に仕るゆく
なせり或時そのまゝ火と灯を連
木像の面を見しるゝ
ぬくれ出さゝ人妻の髮付
さるあて妻と三年の為さび
させる所に行るもありしと

寡あり渡る。其郡
に年来来馴せる。
燕の一偶ゐるが。雄
うせて。雌そぐ孤。夫
雄にも偶なで。花行

張孝張礼（ちやうかうちやうれい）（兄弟）一年（ひとせ）
きくんの時本の実を拾ひ八
十ヨリ[illegible]をゆるへ[illegible]人
ども[illegible]を殺して喰いんと
いふ張孝[illegible]
とたがひに死を[illegible]人も
[illegible]義[illegible]死を[illegible]
その上本二石塩一結[illegible]



かり。姚玉景氏雄に
云ゆう。汝も心あらば
矣雄に配偶事勿き。
自が食を啄ぬ。自と
同じ清きものなれ

此文人は兄弟にて[illegible]の孝
行[illegible]兄弟の中もよりしが
[illegible]の[illegible]三ツ[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]



あまたしと言合ぬ。後
氣を以ぬ。その足尓
法なく。市やして。会
以に飼ありしかな。其
秋い燕婦去て。[illegible]



春天雄にも双ぞし
て。孤姚玉京が家に
来りたれば。いとゞ姦と思
ひて。詩を作りていはく。
昔時無偶去



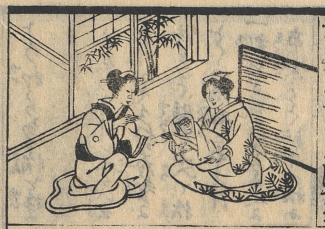
今年還獨歸
古人恐既童
不思更双飛
昔時無偶去。今日還
独歩とは。おぞの秋双

小兒養育帖

そもそ父母の両精子宮に入ていたの精にくさて盛を包ときは男子とか母の血にて父の精をつくむとは女子となる事天地自然の妙合あしてこり於ける時その一月は霧のごとく二月は桃のごとく三月は男女のうちこゝろ四月はそのなごさをあひ五月にはみ勝いでさ六月は六腑あまり七月にはそべくさらにあり八月は魂ねそなり九月は三こゝびを成とてんじ十月には

明くし母。去をなる燕の。今年独歸るよせ。言るんなり。古人の恩既重。不恩更双飛とは。かの所終をなり

女中冊六



氣を清て夢のこめくるゆゑ生るゝなり尤も月を生るゝは木の実の熟し蒸るが如し十月とこゝろまでは八月九月は生るゝは熟する事のつゞきなり扨又十月にて生るゝ時は取揃て移りをまゝ汲ちかた

男は恩愛深く重を誇る。改て他丈に姻偶事は容堪難しと。いふんを。今世燕に擬らへて。双ぶ飛に恩



ぴぞとはいはり。誠に
貞女のおこなざし
なれ。非情の鳥類さ
威じ行り哉。聞して
人なるを以て。鳥より

甘草を合せて煮じ
さるを呑むべし
一乳つけはれて成そくさ
ゐしこ子を乳くそこそ
さる人を乾く飲むべし
一臍の緒をさらも刄物を
いまく竹篦を用べし
一母ちく少なき時は裡絹
を食むべし又桐の木を
せんじ服むもよし
飯なれ麦飯を食むべし
また露蜂房をせんじ
用ゐべし
一兒生まれて三十日めに
胎髪を剃三十二日目
女子は三十一日に宮参りとて産

ぞ哉不如重ろんや。
一妻女の道正しからざ
れば。内乱を家亡る
事。性者より教多し。
行儀能婦の口徳を



仙へ慈愛のんぬく。
男姑より能はりへ。
子孫を善教導紀。
國門の教正しきを。
賢女といふ事し。宋



王の夫人は伯姫といへ
る事。東門殿に夫人有
きなり。人々皆北教
しに。一人乃臣下。候
出王へといむ事也。

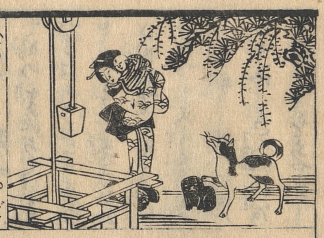
里是ようぬるゝ生の鰯の
上をさゝ飲ばかりさせて
以来ぐに堅ゐるを食
むべし是も生きと十月
ゑ過ぎ浸ばさべし早
ゑまゝ脾胃ばをおちひ
疲ひ成生ぬ又あまり久
し乳を用ゆるも行く
大体食をくいしむるゝ
歯のさゆるを其妨と
ちべしこれ食ばくふ
附ゑるの自然あり又生
ゑたぐつる松ハ春ハ天乳
とく暖ゑ夜ハちぐし
きとあらうて遊ぶに
べし飾り大事ゑかけ

女の禮義侍女二人
供をばきゞ。来ゑ出り
せぬ法也とてお給ひぞ。
終ゑ燒死ゑまひきる。
此ゑ節義乃ゑめに



て風の事にあてゞ育
つるはあしきまあり
きしばとく哭きひれ
さ風ゑやうある所ハ
必むべし又ゑ夢を生
して楽し哭ソセ或ハ
おそ話しき人形杯ゑ
ゑ捨くきをあやまし

高行と云女ハ。鼻を
割。合女ゑ賊。季氏ゑ
脊を割。魚氏ハ眼を
抜て捨しと聞り。蕉招
れ奥女ハ名を高く



川橋に乃ぞませ井戸を見せ牛馬のあるへくよせ犬猫をあらづしを又ハ群集の人中或ハ墓所等の陰地に行こと故いむべし故て小児の育り然るハ余り大事に過ぎたるなり

末代ぬ境也。書ハ智なれバ夫の禍ハ女にものなり。夫ハ夫を揚善を能し上ハ親を和合せしめ。早き夫



の嶽とてこれ田夫のそこ法る如くかゝくをなし故に名をも賤くかこどうつゝる事なりさて口あるもあらば男子ハいつのぞりとあげ行馬にゆこうしせ女子ハ孫子てまりを法して湯気

みくこも。恐怖をもらく。随ひ為。其見をもて。家の業裏ハ書ハ苦悪によるものなれバ。能怖く婦の道を守ぜ。

一凡女子は他の家に行。
一生身をまゝ事。終
ものなまゝば。憂苦憶
思ざれば我身を保す
不見。古人も難嫁女子



百年憂苦任他人と。
宜なる哉。此言男姑
はじめ。一家親類に
眷属りて。風波の
属如世間の人情なれば。



二ツの眼あきらかに備へ
なぐ一字一点とよみえ
ざるはいとにしきつゝ
らむや夫のこなるに人情
ふいひがたまなどのわ
りてもまつすぐ様に悔
とも冷なし所の藝を
兎もあまるあらひもの
よりのたはいからぐてろ
がくべきなり
一女子第一にたしなむべ
きは淫行のうざし人の
妻としてく夫及び嫉ま
衣類を仕立てきたるい
元ようの彼なれば志で
うなりぬるなりしや者

我んに物事十に
九は叶ふるまじ。
そこで物に能忍を取。
此を保の要とすべし。
夫堪忍乃文字は堪は

曲その所生を者楽の湯
木の托藝に巧なりとも
淫行に疎きは女の名と
いふべきにて紙とて是
て能ならひおかねだし
抱く無用なるは人の
乃ん事をもとづかしから
ぎやはしむへし

たへ忍は志のぶと訓
り。亦しらゆるとも
訓り。忍の一字を忘
るゝ時は一生身を保ち
難し。易といふ書なれ。



一衣あらひ洗ハ女のまさ
ざの第二なりとちろん
まさくいかやうのいや
さつぶとあしあふまれ
たるんとも毛女のしべき
こざある故り此婚礼の
此居るうも簇絹洗を
持せたまふと以て知る

悪の字此象を。人乃
心悪上ふ。水のごと紀
刃を作し置さるり比
通り。心のうへに利刃を
さし向てきらんなは。

此じ此字ぶまぐの
事にあらんといへとも利
ざる時ハあらひ張ぶり
曲こなりして見ぐるき
りのといけるさ時より
祇見ぶりの嫁入してを
れとも垢のつゝぬきぬを
吏ともきせその祇を
さるを女のたしなを
といふべし
一女ハ者より行けてか
こをみざさん又けそひ
そしてたしなを行事
なりしりとて深さる
行りしりとて非ん
愛をゆひ紀物をかい

此を思ひの絵に働
事なるべからん。能情
悪を以て。女子の
婦徳といふ事し。
一百行の苦事も。悪

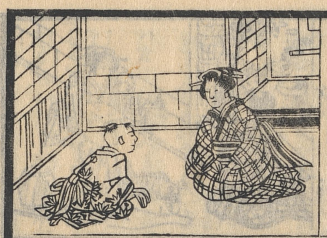




耳乃色の風せなせと
言り。怒筆あしられば。
心火熾ふ。炎本ん此
明智を晴し。暖黒ん。
人を怒詈ん種。苦し地



鞭迅面烈。眼にて拒す
く。言葉荒くし絶。
拘いひ無吉人を託。
此を恨。外見すは鬼
女のごとし。識り女子



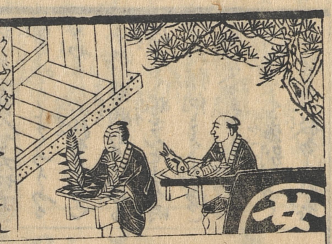
夫人をごろづきし彼孟母の三遷の主体をもとんにうきくしかりもべらじ人は生まつきといへど大うさは云ずらにうきで雲は幼子は白糸のごとくおやのんに我のいろとなるものし

なる人名我所を省てんを和順にし。万事堪忍。親戚奴婢おなじまで。慈悲を当ふもべし。一夫人を仕たむには。

結納婚姻の心得

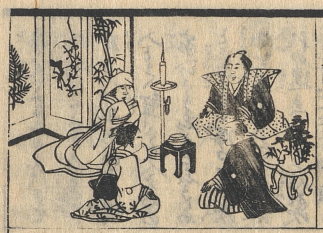
女子は父母の命と媒妁とにあらざれば まじいらじ親しまじ元来一の掟にて女子の情を当事の箇條なり凡此一事を聞くなるんあるなどなきは良人と大切な因男姑なりよくつかふるがあるは必然なるものしされば媒妁あり父母も許して妨さんとする時まづ結納とて是を受る元来も上中下何所にも差別あるべそのさま一般なるべし

第一慈悲あるべ。恵情と恨讎まぬ様に。んゆるるがたし。我所も下人を仕たる様は主用達をば。下さいは又主人を



角多浪をうへつゝそれより内端にあるを是を言ひ
せべしこの結納を交る日を女子積雅をふむ
これも尚時は大かたまちらぞまゝこたのも此を指
あるひは五種七種あり
その次ぎ多浪まうへし 仔

周ま孫は。夜食の事而
所し。富者乃果報に
よりあ。主人となる。
須數と成といへど毋。元
天地一体の成なまじ。



りに倹約なるも禮に闕
るなり凡婚姻は男女一
生の大禮なり男は家
お續たべき子孫設る
者女子は生がいほとを
ふ良人を定むるなれば
生涯の礼ことより重
きは迄事ひにつゝ

我に仕るを。彼に仕を使
を。現世ぞうまれ機縁
にはあらじと。嫌ふく
思ひとりて。一夜の夜
れをも拒し。一食をも



廉界にまぐらぐさを
婚姻の日にあらば遠の
ならいに叱ひまづ婿
入とて聟なる人よめの
家へいらうとしるとあ
と慧しく帰るその後
娘をしりてさし気古
れの迷まるなりに歎

頒与へ言実に慈悲を
なさばいかぞ恵を
疎に思ひんや。修令我
夫の心に合ぬ下人なり
と意能くいひ教図

茅弐拙ぢるにむうしハ
娵の聟のうさへ始めよ
り行事あくまづ婿の
うさより来りて盞を
なし夫婦の固を形し
婿その家に留る事式ハ
三日五日品により以ゆゑ
永きもあり其後に婿の
方へ引とるあり故に
婿入の式といふ事ハ多
くらんえさまごと嫁入の式
の事ハこえびさんバ婿
なる人まづ住て男姑に
見参し其数に拜り
新婦を近へて盃弐
あまたハ右の古礼を略

らじ。和融に滅む
面し。又夫乃前にて
も苦様に云なし
く。下人の客を挙
べらず。苦も悪も婦



せるあり然るにしかれ
婚姻の盃ハ女より呑れ
じむるゆゑ其室席も婚
ハ客位にありて嫁ハ主
位にあるあと女ハあるじ
方ある故なくこれらハ
娘とおこれの遺意なる
あと明けしまて是

人の化になるまきだ。
万事恵情むんあら
んにハ。其家和睦し
て姻人の情弥彫る
べし。陶淵明のいへ冷。



婦の盃ハ仲人の上縁
紳にいたりてハその式
法師にならだんだ知る
べからず果然すれば
作法ハ多く世間にあり
ゆきて人の能知所
あるまいてこに畧す

彼も人乃子也。
憐えてはらふべしと。
永々此心忠べからず

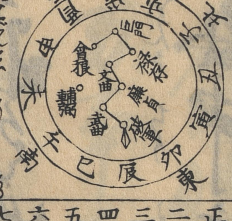
女中庸終

月之異名

正月	二月	三月	四月	五月	六月
睦月	如月	弥生	卯月	皐月	水無月
端月	夾鍾月	櫻月	花残月	菖蒲月	鵜飼月
太簇	夾鍾	姑洗	中呂	角飯	林鍾

七月	八月	九月	十月	十一月	十二月
文月	葉月	長月	神無月	霜月	師走
七夜月	月見月	紅葉月	時雨月	陽復月	臘月
相月	雁来月	玄月	陽月	壮月	四極月
夷則	南呂	無射	應鍾	黄鍾	大呂

破軍星操方



夫破軍星の操り其の居に因て違ふ事あり正月子の時よる時先むく丑の時よろあり丑より五ツめ寅の方よりむく其余ことごとく准ひあるべし

正月	二月	三月	四月	五月	六月	七月	八月	九月	十月	十一月	十二月
五ツめ	六ツめ	七ツめ	八ツめ	九ツめ	十めめ	十一めめ	十二めめ	一ツめ	二ツめ	三ツめ	四ツめ

十干

甲乙　丙丁　戊己　庚辛　壬癸

潮汐乃滿干

毎月ごとにほぼ	朔日	二日	三日	四日	五日	六日	七日	八日	九日	十日	十一日	十二日	十三日	十四日	十五日
十七日	十八日	十九日	廿日	廿一日	廿二日	廿三日	廿四日	廿五日	廿六日	廿七日	廿八日	廿九日	晦日
朝	昼	夜更着	夕	夜	晩
六ツ四ア	九ツ八ア	八ツ二ア	八ツ二ア	七ツ四ア	七ツ四ア	七ツ四ア	六ツ二ア	六ツ六ア	六ツ六ア	五ツ八ア	五ツ八ア	五ツ八ア	四ツ二ア	四ツ六ア	九ツ
九ツ四ア	八ツ六ア	七ツ八ア	七ツ八ア	七ツ四ア	七ツ四ア	七ツ四ア	六ツ二ア	六ツ六ア	六ツ六ア	五ツ八ア	五ツ八ア	五ツ八ア	四ツ二ア	四ツ六ア	九ツ

婦人教訓書　全冊
女今川　操鑑　全冊
女大学宝箱　全冊
女用文章　全冊
女四書　全冊
教女子誘導　全冊
女人百首開縄　全冊
後選女人一首　全冊

洛陽　植村玉枝子編述

明治四辛未年再刻

大阪心斎橋通北久宝寺町
河内屋源七郎

同　南久宝寺町
伊丹屋善兵衛

發兌
書林

頭書終